

学位論文要旨

満洲引揚げ女性文学研究

広島大学大学院人間社会科学研究科
教育科学専攻 教師教育デザイン学プログラム
国語文化教育学領域

学生番号 D202906 氏名 王璇静

【論文要旨】

本論文は満洲引揚げ女性がどのように語る・語られるのかを明らかにすることを目的とする。とりわけこれまで抑圧され、主流ではなかった女性たちの声やイメージに焦点を当てる。

敗戦前、日本は満洲、台湾、朝鮮、樺太を植民地として支配下においていた。これらの地域は一般的に「外地」と呼ばれていた。多くの日本人が本土から「外地」に移住し、その地で生活基盤を築き上げた。しかし終戦後、帝国日本の崩壊に伴い「外地」に在住していた日本人は本土に引揚げることとなった。この敗戦後に発生した非自発的で大規模な人口移動の過程では、様々な悲惨な出来事があった。戦後の日本は新たな国家を建設する試みに直面していた。となれば、戦後の日本が引揚げ体験をどのように叙述しているかを明らかにする必要がある。これにより、引揚げ体験が戦後の国家に与えた影響や、国民の共有する記憶の中でどのように位置づけられているかが理解されるためである。

引揚げ文学に関わる研究は一定の蓄積がなされているが、まだ触れられていない議論も多く存在している。先行論では外地で生まれた作家たちを重視しており、満洲に移民した人たちの存在が研究の視野から抜け落ちている。そして、引揚げの語りが同一性に回収されることを回避するために、引揚げ文学作品を再考することとともに、現在までの文学研究から見過ごされてきた作品を発掘することも重要である。また、引揚げは、その語り方が過去の出来事を再構築するものであるために、書かれた時点の社会的現実を反映している。そのため、戦後日本の再構築を考察する際には、文学作品が書かれた時代を考慮しつつ、引揚げに関連する文学作品を検討することが不可欠である。

研究の視座として、本論文では引揚げ文学における満洲引揚げ女性の語りに焦点を絞る。

戦争の語りを整理する時代に、引揚げに関しては母親が子供を連れて日本本土に帰国するという物語がパターン化した一方で、その他の引揚げ女性の語りは後景化していった。そのため、パターンから外れた声に焦点を当てる必要がある。

日本引揚げ女性は視点の取り方によって加害者にも被害者にも見える存在である。日本人女性は、満洲に移民生活をする時には支配者であったが、終戦後には現地で被支配者となることがあった。敗戦国の国民であったために他民族により被害を受ける可能性があった上に、女性は日本人集団の内部でも被害を受ける可能性もあった。ゆえに、女性による引揚げの語りはより複雑な様相を呈しているのである。その中でも、性的被害は回避できない問題である。山本めゆ¹は引揚げ女性が受けた性暴力について、「性暴力の様態の変化に伴って姿を現したのが、加害者と被害者の周辺に存在していた仲介者・協力者・受益者などのアクターである」と述べている。山本が論じているように、「女性はいつも戦争の最大の犠牲者」といった普遍主義的なミリタリズム批判や家父長制のなかで引揚げ女性が受けた性暴力を論じれば、「仲介者・協力者・受益者」らを免罪し、女性を常に受動的な存在として男性に対置させることになる。それにより、「集団内部のジェンダーや階級、エスニシティなど多様な差異と権力の交差」が見落されてしまう²。これを逃れるため

¹ 山本めゆ「戦時性暴力の再—政治化に向けて—「引揚げ女性」の性暴力被害を手がかりに」（『女性学』22巻、日本女性学会、2015.3、44-62頁）。

² 注1に同じ。57頁。

に、本論文はそうした多様な差異と複雑な権力構造を意識しながら、引揚げ女性の語りを読み解いていく。

戦時中に日本の支配下にあった満洲や台湾、朝鮮、樺太は全て「外地」と呼ばれていたが、それぞれが独特な文化、歴史、社会背景を持っていた。本論文では引揚げ文学の中でも特に満洲からの引揚げに焦点を当て、満洲からの引揚げの語りに注目したい。1932年から1945年までの間に存在した満洲国は、日本帝国によって支配された傀儡国家であった。当時の満洲は五族協和という民族政策を唱え、多くの民族が共に生きる多文化・多言語の空間であった。そして、満洲は実際には日本が支配していたが、表面上はある程度の独立性を持っていたと言えよう。満洲は日本本土の以外で新たな政治的な構想を発展させることが可能であり、日本の社会的実験室の役割を果たした。

このような「独立国家」の満洲を構築するために、戦争期には、「満洲国」を支配する官僚や関東軍の軍人、建設の近代化を担当する満鉄の関係者などの統治者として満洲に移住した日本人だけでなく、満蒙開拓団として入植した多くの農業移民も存在していた。生田美智子³は、女性が「なぜ満洲へ行ったのか」という問いに対して、「日本人風俗女性」、「満鉄関連の家族や職業婦人」、「父や夫に随伴して渡満」した女性、職業婦人と大陸の花嫁といった「自ら渡満」した女性、そして看護婦と女子挺身隊といった戦争動員された女性たちが存在すると整理している。これらの女性たちが持つ階級や生活環境などの差異を意識することが重要である。日本の敗戦後の満洲はソ連の参入で複雑な情勢に巻き込まれている。戦後日本においては、引揚げを戦争被害の物語、特にソ連軍や現地の人々から被害を受けた物語とする傾向があった。しかし、引揚げの悲惨な体験の語りには、戦争がもたらす悲劇を語るだけでなく、日本政府が日本の国民を守らなかったということを示す語りもある。松田澄子⁴は満洲に渡った女性たちの体験に注目し、「開拓民の妻となった「大陸の花嫁」および義勇軍の「寮母」となった女性たちに期待された役割についてと、引揚げ女性たちが受けた非合法的な中絶手術、開拓団における「性の接待」について、女性史の視点から、日本の加害性を指摘している。では、彼女たちの体験は文学の視点からはどのように語られているのだろうか。

以上を踏まえて、本論文が研究対象とするのは、「官僚夫人」であった牛島春子の引揚げに関する「筐子」「ある旅」「十字路」「知子」「アルカリ地帯の町」の五作や、宮尾登美子による実体験に基づいた作品『朱夏』、「大陸の花嫁」だった井筒紀久枝が執筆した俳句句集『望郷』や自分史作品『生かされて生き万緑の中に老ゆ』『大陸の花嫁』、引揚げ女性強制中絶手術事件に関わる表現（とりわけ上坪隆の医師や看護婦の証言を基にしたドキュメンタリー『水子の譜』、鈴木政子が女性の視点から一人称で記述した自分史『わたしの赤ちゃん』）、戦後生まれの女性作家である津島佑子が書き上げた『葦舟、飛んだ』といった作品である。これらの作品を通じて、引揚げ女性を取り巻く民族及びジェンダー問題についての考察を行った。

なお、本論文は七章から構成される。

³ 生田美智子『満洲からシベリア抑留へ 女性たちの日ソ戦争』（人文書院、2022）。

⁴ 松田澄子「満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第45号、山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、2018.3、21-36頁）。

序章では、本研究の問題意識について説明した。そして、先行研究を踏まえて、本研究の課題とそれに対する研究の視座を述べる。最後に本論文の構成について述べる。

第一章は、植民地・満洲を特権階級として経験した牛島春子の小説を分析した。牛島の作品における異民族は、敵軍として恐怖の対象として描かれながらも、個人としては異民族から善意を感じたことなども書かれている。そして、作中では「満洲国」の本質が問われ続けた。とりわけ「ある旅」では異民族表象を通じて満洲国への思考が描かれ、敗戦後の解放感もテーマとなっている。彼女が感じた敗戦後の自由は、ジェンダーの枠から解放されることだけでなく、戦時日本の体制から解放されたことも含まれていた。しかし、その解放感は一時的であり、現実の厳しさと責任への気づきが存在していた。牛島は敗戦後も植民地体験と戦争責任に向き合い、終戦がもたらした自由とその限界を描いた。牛島が見つめた植民地体験と戦争責任を描いた作品は、敗戦直後の日本では注目されていなかったが、引揚げ文学としては欠かせない存在と考えられる。

第二章は、宮尾登美子の『朱夏』を取り上げ、植民地および敗戦・引揚げの語りに関して分析を行った。特に、女性が受けている抑圧や暴力に焦点を当て、主人公・綾子の視点を通して描かれた他の女性像を分析し、作品の抑圧と被抑圧の問題をどのように描いたのかを検討した。『朱夏』は日中戦争から引揚げまでの時代を背景に、家父長制やはびこっていた女性嫌悪を浮き彫りにしている。作中では良妻賢母教育下の女性と満洲の娼妓たちの抑圧が対比されて描かれた。しかし、「汚濁」を嫌っていた綾子の価値観は、教師であった利子が性行為と引き換えに食べ物を得る場面を目撃するという経験などを経て崩れてしまう。このように、『朱夏』では綾子の成長が描かれている。さらに、『朱夏』には敗戦で権力関係が転倒するとともに、それまで優位だった存在が被支配側の意識に目覚める構図も読み取れる。綾子は引揚げ体験を通して抑圧者であった過去の自分に直面する。『朱夏』は引揚げや敗戦を日本人の悲劇的な物語として描くだけでなく、異民族に対する搾取も取り上げている点で、支配者の反省意識を読み取れる作品である。

第三章では、「大陸の花嫁」だった井筒紀久枝の創作に焦点を当てて、句集『望郷』や、自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』、自分史『大陸の花嫁』を照らし合わせ、女性主体の語りで表現された引揚げ体験を明らかにした。『望郷』では、俳句を通じて開拓民の日常生活が描かれ、庶民の生活の一断面が窺い知れる。自身の体験を綴った自分史『生かされて生き万緑の中に老ゆ』では、「私」が母の介護から戦後の体験を回想し、自らの来歴を問い直す構図をとり、私と母の関係から人生の意味を探っている。この作品の10年後、井筒はもう一つの自分史作品『大陸の花嫁』を発表した。『大陸の花嫁』では、日本と満洲の対立や植民地支配への反省が見られ、特に女性の立場や戦時中の結婚制度の問題が強調された。とりわけ、「妹」が日本人集団から受けた被害を告白することで、「私」自らの加害者的側面をも描いている。このことから、『大陸の花嫁』は個人の物語を超え、戦争に巻き込まれた女性たちの存在を作中に浮上させている。これらの分析から、個人の表現は共同体の中でのアイデンティティ構築にも寄与すること、戦争体験の多様性を取り戻す重要性を示唆した。

第四章では、引揚げ女性強制中絶事件の歴史を振り返り、文学の視点からその表現を考察した。引揚げ女性強制中絶事件に関する表現の中で、ドキュメンタリー『水子の譜』や自分史『わたしの赤ちゃん』に注目した。『水子の譜』は医師や看護婦の証言から、手術を受けた女性たちの苦痛を浮かびあがらせ、日本政府を批判し、それを通して引揚げ者内部の性的暴力や差別を明らかに

している。『わたしの赤ちゃん』は、作者・鈴木政子が中絶手術を受けた引揚げ女性の戦争体験を聞き取った内容を組み込んだ自分史作品である。前者は日本政府への批判と引揚げ女性の多層的な被害を表現し、後者は一人称の語りを通じて被害者女性の主体性を強調していることを論じた。

第五章は、津島佑子の『葦舟、飛んだ』を取り上げ、ポリフォニックな対話空間の分析を通して、戦争の記憶を継承する行為の複雑な様相を明らかにした。『葦舟、飛んだ』の特徴は死者の象徴として描かれる幻想的な表現である。登場人物の達夫ははじめ、男性が女性のヒミツを聞くことの難しさを体現するが、物語が進むにつれて、ジェンダーの壁を越え、戦争記憶の継承または戦争中の女性の被害の聞き手となり得る可能性が示される。そして、登場人物の雪彦が持つ女性の戦争被害や胎児たちへの関心は、海洋生物の幻想的な表象を用いて表される。この場面の幻想的な表現を分析し、無名の人々の語りは単一化される傾向があり、それぞれの語る内容が聞き取られ、回収されることが難しいことを読み取った。そのほか、物語の中で描かれる「幽霊」は、無数の死者が暗闇に押しやられている様子を描いていると指摘した。この作品では、戦後生まれの世代の幼馴染たちが「報告ごっこ」を通じて想像力を養い、戦争中の死者や戦争被害を伝承するプロセスが語られていて、戦争記憶を伝承する中での断絶が読み取れる。

結章では、本研究のまとめとして、各章の研究成果を総括し、本研究の結論と今後の展望について述べる。

第一章から第五章までの内容を通して、多様な満洲引揚げ女性の語りを明らかにしたとともに、引揚げ女性の間での差異を可視化した。

満洲から引揚げた女性たちは、男性からの抑圧だけでなく、階級、民族、社会システムなどの多様な要素によっても抑圧されている。女性は常に抑圧されているという一般化された批評を避けつつ、本論文では、女性への抑圧をジェンダーだけでなく、政治的、経済的、社会的、文化的、イデオロギー的な要因を組み合わせながら論じている。これにより、抑圧が多方向に存在し、ジェンダーが常に優位にあるわけではないことが示される。また、女性が抑圧される側であると同時に、他の要素において抑圧する側にもなり得ることが示されている。

女性は多様な複合的要因によって抑圧されているが、中でもジェンダーに基づく抑圧は特に一般的で深刻であり、変化に乏しい。特に、女性の身体は文化的小よび政治的な議論において重要な視点を占める。満洲からの引揚げ女性に関しては、戦時中のみならず戦後においても、彼女たちの身体が私的領域から公的領域へと移行することが明らかである。ボディ・ポリティックスの視点を通じて、個人の身体とアイデンティティが、社会規範、政治的勢力、文化的価値観の中でどのように形成され、対立するかが深く理解できる。

本論文の主要な対象である満洲引揚げ女性たちは、敗戦国の国民でありながらも、植民地で支配的な立場にあった女性たちである。彼女たちが戦争に巻き込まれた経験は、フェミニズムの枠組みのみでは完全には語り尽くせないものと考えられる。また、彼女たちは第三世界の女性たちとは異なる経験をしている。植民地化された国々の女性たちは、戦争において抑圧されながらも、純潔と無垢を守るとされていた。しかし、植民経験を持つ女性たちは、このような無害性の枠組みから排除され、国家とジェンダーの二重の力によって引っ張られている。

日本の引揚げ女性たちにとって、戦争被害者としての自らの民族的アイデンティティを背負うことは、言説に批評性を獲得する上で容易ではないとされる。このため、従来の主流の語り

てはまらない引揚げ女性たちの作品を読み解くことは重要であり、これら排除されてきた語りは、抑圧された存在自体が抵抗の空間を生み出し、批評の可能性を持っている。これにより、本研究は引揚げ女性文学を通じて、ポストコロニアル・フェミニズムに新たな視点を提供することが可能である。

今後の研究においては、女性内部の視点に加えて、男性から女性への視点を取り入れることで、満洲引揚げの語りをより深く理解することができると考えている。さらに、満洲という地域の特殊性を考慮しつつ、引揚げ文学の全体像を把握するために、日本帝国が植民地としていた台湾、朝鮮、樺太にまで視野を拡大する必要がある。これらの地域のさまざまな帰還のルートの複雑性についても、今後の研究で十分に解明していく。